大 で 2009





井覰驢 保多孝三著『柞廬印存』(一) より

中国南宋代に成立した『五灯会元』の巻十三「驢覰井、井覰驢」より。「ロバが井戸を覗き込めばそこにロバが映る。のみならず、井戸がロバを覗いている。」と解説にはあるが難しい。ロバが井戸を覗いているのか、井戸がロバを見てゐるのか混然としてくる世界と独断してをく。「覰」は、「うかがう。こっそりねらいをつけて見ること。「井」の中の点は中空の意とある。

毎月七転八倒して孝三先生の文意を追ひかける。追ひかける楽しさがすこ し分かってきた気もする。「驢覰丼、井覰驢」といふ思考方法は、俳句にも 応用してみたい。





六 笹 富 ち 士 ま き S لح つ 坂

な

る

0)

山

本

町

 \equiv

佐

藤

喜

孝

宇

梅

챧

廃 花 夏 浅 屋 卯 L 0) 木 工 見 束 過 庭 ね ト

7

朝

0)

卓

ラ

石

0)

犬

東

大

宮

山

荘

千 7 0) 青 \mathcal{O} 田 5 <u>\f</u> に 5 l

宙 雨 種 月 Z 0) B な か 果 る 眞 L 田 烏 釜 水 螺 賊 と に が O時 (J 舐 ポ 計 \sim 1 め 0) ば ズ 7 を 付 コ ゐ して (J ン 富 る ビ 7 士 ガ み ラ ゐ _ 0) る Щ

ス

か

る

子

慶

ン 壺 た ス とつ に き 0)

額

0)

花

L ょ り が ∇

初

茄

子

農

婦

0)

笑

顔

か

な

土゚ 亀 梅 杉 恋 器は 菜 猫 鳴 雨 0) が く と 0) を 根 そ 街 手 0) ば 真 杉 ば に に 顔 原 L 寄 麻 0) 紙 0) り を 地 ば を そふ と
こ
い 酒 l 買 7 0) うて 小 明 そ 日 風 < 升 ぎ か か な る な 瓶 足

ほ 5 遠 記 遠 憶 る 蛙 と さと ح 0) と 母 な ぎ B 若 蛙 た 水 L す 向 ほ 0) 谺 き 香 > づ 啼 は を < き 帶 青 目

鳴

5

L

た

り

西

浦

和

渡

邉 友

七

覚

め

ぐ

せ

< 蝉 峡 0) 渡 لح

び

ž

青 田 る 風

母

0)

乳

は

児

0)

睡

眠

剤

恭

弘

子

吉

横 丁

鍋

屋

荒 夕 父 藤 街 梅 水 0) 餉 灯 壺 族 兩 日 に 館 0) 0) に 0) 吟 と め 駅 地 行 お げ 釣 ま 父 7 蔵 果 ~ で さ 0) 群 ン h 灯 Щ ギ 皆 め る ン 女 か < 梅 見 届 V ず 水 雨 () が じ 0) 0) 7 S ま ゐ V L 底 朝 清 瀬 赤 座 典

子

金

0)

目

0)

置

物

め

け

る

青

蛙

向

日

葵

B

膨

5

む

夢

は

工

1

ゲ

海

献

<u>寸</u>

は

手

抜

き

と

な

り

め

入

道

雲

入

道

雲

漁

船

0)

帰

り

を

か

も

め

追

S

雲

0)

峰

屋

内

墓

苑

0)

花

輪

曳

舟

遠

藤

実

雲

0)

峰

 \mathcal{O}

梅

眞

朽

た

父 父 0) 0) 日 B 日 父 に

は

枕

詞

な

L

さ 父 父 「マドマゼルフィフィ」父の < に 0) 花 5 日 道 h B ヴ アージ 女 系 家

ぼ 分 けて 奇 族 口 数 1 日に 0) と ド 贈 偶 緑

る薔

薇

数

と

さ

す

点

睛

川崎·小田栄 木村茂登子

プし 子 む 覗 0) 7 Þ < 陶 雀 姉 が 器 追 لح 0) 如 Z 弟 如 鴉 L 0) き 走 額 笑 藍 り 0) Z 梅 0) 声 花 雨 色

水 族 館

朝

毎

に

咲

き

梔

子

母

に

供

5

ス

丰

ツ

茶

を

摘

万

華

鏡

揚

げ

茄

南 昼 鮪 止 寝 洋 つ 餇 0) 7 0) う Z 游 つぼ さ 水 ぐ か 尻 0) マ な 尾 濁 ン は は バ れ 起 青 ウ り

梅 雨

寒

0)

目

0)

愁

Ç

京

橋

篠

田 純

子

0) エ 1 きて に < 触 泳 ゐ る ぎ るやう る け な り り な

L

な

B

か

な

薄

暑

五の橋光林寺

斉 藤

裕

若 真 舞 夏 Z い 冷 さ 梅 今 0) 夏 ね < 夏 S 0) 房 者 聝 日 夜半ナ が 5 事 舞 日 湿 は か 0) 0) 7 h を B り \mathcal{O} 5 窓 嫌 に ぼ 蝶 つ L 電 7 1 V 際 は V 梅 スシュー げ 7 化 す な を と 風 雨 た 結 設 と 猫 占 粒 を 0) き 備 別 び 夜 ご 着 ょ め 人 れ 目 0) ズ とに 中 ソ は 7 に が B 部 行 を 1 7 ゆ < すうと 夏 屋 及 持 灯 何 ダ \langle び に 夏 か 7 を 処 1 更 る 0) す 余 映 け 過 蝶 7 ぎ 2 す に 水 す 衣 り 宝 仙 寺 前 芝宮須磨子

千駄

木

芝

尚

爆

音

B

ひ

び

<

巣

0)

ま

h

中

に

蜘

蛛

烏

賊

船

0)

点

き

か

ね

7

を

り

夕

焼

か

な

蚊

取

線

香

買

ひきて

開

け

る

な

に

か

愉

L

薔

薇

0)

前

た

5

て

愁

V

のごと

き

Ł

0)

う

代

田

照

る

剱地東出

定

梶

じょ

う

ま

B

が

た

睡

蓮

B

杉

神

社

쀭

0)

幟

万

緑

0)

中

0)

蔵

王

0)

露

天

風

呂

両

の 手

で

捥

ぐさく

5

んぼ

さくらん

ぼ

緑

陰

0)

石

仏

微

笑

手

を

合

は

す

朴

咲

け

り

芭

蕉

と

曽

良

0)

Щ

寺

に

所

沢

須

賀

敏

野 梅 森 絵 人 兩 閑 知 誉 画 最 と れ 展 草 中 ア ず 知 牛 土: ル 楓 人 鳩 優 プ 0) 0) 0) ス 花 先 声 名 見 0) 0) 0)

あ

り

夏

0)

夢

ゆ

る

雪

割

草

<

<

ŧ

れ

り

道

を

行

<

咲

き

に

け

り

本町三丁目

鈴

木多枝子

勤 熟 行 夏 れ 枇 0) 麦 杷 こゑ に 0) つ 至 0) か

ま

る

あ

そ

び

雀

0)

子

浦

和

竹

内 弘 子

洩

れ

<

る

夏

至

0)

路

地

放

題

0)

雨

つ

づ

き

梅 怏 犬 雨 々 鴉 ح わ 夜 れ 生 を を り 太

り

ゆ

<

梅

毛

虫

弱

気

0)

虫

ح

知

る

煩 半 わ 造 紫 夏 世 杏 朝 深 白 陽 り 焼 色 寝 が 論 夏 0) 悶 花 た づ け l 夢 き 生 月 を るへ 0) き 0) 7 < に 背 飛 消 地 ま 白 大 け 末 う び えつつ 中 ある 出 き た 地 イ づ Щ 合 してく h 耳 と 0) いく け せ 小 蝌 池 叫 欲 父 月 と は 蚪 と び 屋 L る 0) 緋 0) 言 顔 か l 羊 語 昇 紐 0) < Z 見 歯 明 り り Z め れ 夏 \sim 占 若 易 き だ け < h ず 祓 か ぼ 師 葉 り れ L 三 田 光 坂 端 東 田 中 亜 藤 未 穂

柊 蛍 老 浜 退 梅 公 枝 史 緑 人 木 雨 拡 實 袋 斉 粛 σ 院 ホ 綿 湿 げ 虻 に 0) 古 1 垣 B 0) り 見 り 黄 遊 0) \mathcal{L} Z 聝 忌 弟 上 根 見 な 唸 る 敷 具 明 げ 上 B さ り る Oけ 静 石 げ る と 0) 0) に ま \Box は 泪 る み は 友 苔 あ Z 程 る ど 5 梅 な 0) 0) < け 緑 緑 り れ ほ か 沙 蝈 5 燕 兩 雨 夏 半 λ 羅 半 雨 0) み か か 0) に 双 世 笑 子 蛙 樹 紀 ば な め 聝 な 大 富 宮 田 長 早 崎 崎 泰 桂 江 子

寿

子

水 数 平 に

多

決

で

き

め

な

(J

で

お

<

梅

雨

0)

果

河

田 町

堀

内

郎

片 言 朝 葉 顔 道 少 市 丰 な 迷 ッツ に V 七 求 夏 夕 め 帽 0) は 空 鉢 水 V を 平 見 と る に

1

0)

間

に

裏

返

り

あ

7

夏

蒲

寸

青 ブ + 葉 捩 坂 今 ベ 初 実 多 初 葡 花 が 朝 桜 梅 ラ 生 口 八 蔔 0) か B 0) と 喜 生 り 0) 卓 ŧ り 多 素 り ズ ダ 0) 茄 ŋ L 藤 ゆ 喜 直 男 子 0) 胡 0) B 原 な 手 つや < 茄 若 頭 瓜 ほ は 螺 竜 り L 肩 子 B 旋 L 闷 也 か 登 腿 紫 か 先 き 0) 東 に る 回 に に づ 家 京 亡 日 梅 \prod 修 ح 宝 夫 系 夫 を タ 聝 に 羅 緑 0) か め 0) 好 ワ 晴 乗 友 2 1 間 る < 前 雨 像 な 中 落 合 井 森 森 Щ 0) 理 和

西行のまなざし置くか花一枝

渡邊 友七

る「願はくば花の下にて春死なむそのきさらぎ 選している。その家集『山家集』に収録してあ の望月のころ」という歌は広く知られている。 義清。『新古今和歌集』には最多の九四首が入 西行のまなざし置くか」というのは、 西行は平安末・鎌倉初期の歌僧。 俗名は佐 この歌

夕立を斜にかまへて北斎画

を意識した描写であろうか。

遠 藤 実

葛飾北斎は日本を代表する浮世絵の画家で

年前、 快晴」(通称、 な角度から描いた名品である。その中の「凱風 三十六景」は、各地から眺めた霊峰富士を、様々 あり、世界的にも有名である。代表作の「富嶽 まだ中国にいた頃、 赤富士)は特に美しい。二十数 日本の友人から、

> 入ったので、その年賀状を今も保存している)。 されてしまった。 来日後、 見ることができて、すっかりその美しさに魅了 めて北斎の赤富士を見たのである(非常に気に の赤富士を印刷した年賀状を頂いたので、 いろいろな画集を通して北斎の画作を はじ

描いた。画面を斜めに降る夕立を線状に表現し 出した夕立に遭って周章狼狽する様子を克明に 岸一覧』の中の「新柳橋の白雨」であろう。 た印象鮮明な構図である。句の作者も北斎を愛 柳橋の白雨」は橋を渡る画中人物が不意に降り 因みに、 句に詠まれた北斎画はたぶん『絵本隅田 その画意を句中に移したわけである。 歌川広重の「東海道五十三次」もこ 川 面

刻々と車窓に迫る雪解富士

のような夕立の景色を表現した。

赤座

典子

車窓に迫る富士山を私もいつか見たことがあ 雄大な富士の山容が次第に車窓に迫ってく

る景色は壮観そのものである。

る。

ばら咲きて鉄扉は銹を深めゐし 芝 尚 子

も古びた風情を帯びる。鉄扉とのコントラス びている。その錆びた鉄扉越しに見える紅薔薇 トを通して、赤薔薇の花弁はより質感的になっ 薔薇は真っ赤に咲いている。 鉄扉は褐色に錆

村中が菜の花明り波の音

鈴木多枝子

海

て、まるで油絵のように見える。

る。真昼の陽光のもと、 に近い村落は菜の花で埋め尽くされてい 輝くほど美しい黄色は

の音も聞こえてくる。 見渡す限り続いていて、 時折、 彼方から海の波

陽炎へる戯れをりし池の魚

山荘

慶子

陽炎を追うように、楽しげに戯れている。 池面から陽炎が立ち昇る。水中の游魚はその

卯月晴能登半島の白帆かな

吉弘 恭子

崎と呼ばれる岬があり、眺望絶佳の名所として 能登半島は石川・富山両県境付近を基部と 日本海に突出する半島で、 その先端 に録剛

いう三つの名詞による句の組み合わせは能登半 景色である。「卯月晴」「能登半島」「白帆」と めてみると、白帆がその視野に入った。 美しい 島を訪れ、素晴らしい晴天に恵まれて大海を眺

知られている。

句の作者は初夏のころ、

能登半

いなと旅心が思わずわいた。 島の夏景を生き生きと描き出した。 句を読んだ私もいつか能登半島へ行ってみた

河川敷工事中なり燕飛ぶ

早 泰江

に営巣して、秋、南方に去る。 燕は人間に懐く鳥である。春に飛来し、 人家

ろへ、燕も飛来している。長閑な春景である。 水害を防ぐための河川敷工事をしているとこ

元代の詩人王平甫には「繚垣烏鵲近人飛。(垣

う景色になる。漢詩と俳句は近いものですね。 川敷工事現場を巡って、人に近づき飛ぶ」とい を「燕」と置き換えたら、そのまま、「燕は河 る。もし、「垣」を「河川敷工事」と、「烏鵲 を繚りて烏鵲は人に近づき飛ぶ)」の詩句があ

人工呼吸ビルのはざまに夏の雲 堀内

郎

ビルディングが林立する大都市。

犇めく群

から夏の雲が覗いて、まるで大都市は人工呼吸 衆。酷暑の夏が来ると、市中はますます息苦し を受けているかのように見える。 い状態になる。林立するビルディングのはざま

ばつさりと菖蒲投入る野天風呂 森 山のりこ

という。中国では、五月に災厄を払う薬草とし として用いられる。 て昔から使ってきた。漢方では、菖蒲は健胃薬 を入れて沸かす風呂に入浴すると、邪気を払う 五月五日の端午の節句の日に、菖蒲の葉や根

無病息災を願う一心で露天風呂の中に菖蒲を

喚起する映像である。

(ここまで 喜孝)

豪快に投げ込んで、それを菖蒲湯にした。旅先 の露天風呂であろうか。 (ここまで 王岩)

面貌の爆発寸前朝の雉

がでてゐるのだらう。「爆発寸前」が生命力溢 人間の顔ではない。 雉の面貌である。 理 和

れる雉の姿態を象徴してゐる。朝日は色温度が

先生の坐りさうなるうまごやし 数時代前に流行つたと思はれるフレアスカート たとき作者はふと幻のやうに映像が浮かんだ。 なささうだ。ここではクローバーとして強引 低いので赤色は一層赤く見えたことだらう。 のまんなかで花のやうな女先生。周囲を囲む生 に曲げて読ませていただく。広がる緑野に立つ たが違ふらしい。私はうまごやしは見たことが うまごやしはシロツメクサの別名と思つてゐ 映画の一場面でもあらうか。うまごやしが 定梶じょう

白

ぼ

た

Ь

赤

子

は

眠

IJ

つ

つ

笶

ιζι

芝

尚

子

純

子

裕

子

慰 母 八 夕 ビ 揚 ひ 鴨 П 薫 面 ょ ツ 引 煕 の ル 霊 立 風 脚 貌 つ 蝶 ジ < 日 群 ゃ 堂 を 門 ح ت の ゃ 面製 ^ も の L١ 斜 石 仁 つ を の 首 爆 夜 の て に 像 ιŠἳ 道 L 王 都 に 腕 発 ιζι か づ تع ゃ の 嬉 た 納 高 こ 若 き か 犬 ま 4 < L 速 め 眠 に ま 撫 葉 ^ ま き も 前 る で 啹 て U ぜ て に 孑 薄 も 雨 根 朝 ゃ 青 て 魂 北 暑 の 楢 後 つ 里 の 葉 宿 斎 み 電 か 若 か 神 ത 葉 る る 話 楽 闇 な 沼 ıŠ١ 雉 画 篠 斉 遠 赤 渡 吉 Щ 森 木村茂登子 鎌倉喜久恵 吉成美代子 藤 弘 荘 邉 田 座 藤

釋

迦

牟

尼

の

堂

外

び

5

ŧ

春

の

雲

佐

藤

喜

孝

理

和

慶

子



典

子

実

友

七

恭

前月作品

難 人 仕 河 實 た Ш 先 胡 前 み 静 事 I ち 生 を ま b ŧ 法 Ш 瓜 け 呼 上 の 結 b の は き 師 揉 敷 さ 手 < 吸 ひ 坐 ιζĭ IJ 兀 花 で の ビ I ゃ IJ 日 の み 出 野 無 股 の ル 雫 さ ま \Box 箸 事 来 П 蕗 う 名 を 白 の で が な 中 た 野 楽 切 な が は さ 娘 武 子 な な 膳 つ る ざ L ゃ 続 き \pm 供 う ゃ て ま IJ の ゃ の 父 に まご に 苗 夏 ゃ あ 燕 日 厨 母 夕 風 夏 に 木 う る 桜 ご 飛 薄 の ゃ の 晋 処 薫 鳴 な 暑 雲 < ιŠἳ ιζι 味 す 蕊 幕 b ع る 藤 早 長 田 竹 須 堀 東 鈴木多枝子 定梶じょう 芝宮須磨子

内

弘

子

中

藤

穂

亜

未

賀

敏

子

森山の! 喜 孝 抄

内

郎

野

寿

子

崎

泰

江

崎

桂

子

<



五月某日抄

佐藤喜孝

あかんぼの頭ゆらゆら白牡丹

慰 雨 靈 あ 堂燭 が りいてふ若葉はくはしくて とあらがふ若葉光

花いてふ地に鳴き交はす晝の鳩

花うつぎ池に流れのゆるくあり

黄 菖 蒲 に 0) L か か り きし やぶから L

切株に雲わき出づる梅雨茸

水渡り風は若葉を鳴らしをり

新緑の水際に立てば佳き人に

回向院拔けて場所入今年竹

夏柳吉良邸後の赤提灯

盗人の墓にも卯の花くたしかな

近世俳諧と漢詩文 2 弐拾弐

土岩

糞土の牆いふ伯父も持ねば

はたひろの大蛇と成ッて昼寐かな

白

雪

白雪、寛文元年 (一六六一)~享保二十年 (一七三五)。本名は太田長孝で、通称は金左衛門である。 別

号に有髪散人・周白雪などがあり、芭蕉の門人である。

た。孔子はひどく腹を立て、宰予のことを「朽ちた材木には彫刻のしようがない、腐った土塀には上塗りの からず。 糞土の牆は塗るべからず。」 (『論語』「 公冶長」) が思い起こされるであろう。 「宰予」 は孔子十哲の 一人で、弁舌に長けていた。ある時、この宰予が昼寝をしていたところを、先生の孔子に見つかってしまっ 「糞土の牆いふ伯父も持ねば」という句題から、自然に孔子の「宰予、昼寝ぬ。子曰わく、朽木は彫るべ

しようもない。」と罵った。

い夏の昼寝を貪っていると、白雪は『論語』を生かし、「宰予」から世間一般の人物へとイメージを転換させて、 孔子のように「糞土の牆」と罵ってくれる伯父もないので、大の男は安心して半裸の姿で大蛇のごとく長

因みに、『夏つくば』(石霜庵二世 紀逸編)という俳書には、美好という俳人の句、

昼寝の人物像をユーモラスに描きあげた。

短夜や宰予が昼寐呵られず

な昼寝があってこそ詠まれた俳諧である。 うに昼寝をしても誰も咎めてくれる人はいないであろうという句意にも取れよう。歴史上、あの宰予の有名 も見え、宰予の昼寝を弁解するような口調で諧謔的に表現している。或いは、明け易い夏なので、宰予のよ



蓮

ゃ

起

T

ゐ

7

夢

見

た

IJ

雪 夜 絵を見て 仕 事 の 聞 え て 寒 L つ 夜

る な け 花 き IJ 見 水 夏 か 離 の 月 な れ 下 ぽ 東 手 つ 西 き の に IJ 絵 ひ ۲ の か 折 ゃ ^ て う て こ に ろ 啼 咲 ιŠί ゃ た ゃ 轡 る 大 桜 む 根

伊勢の国、 六間茶屋にて

> 哉 引

L

着

油 ほ 鰒 ۲ 気 汁 ۷ の ぎ ゃ ぬ す 好 け こ 日 む ち 和 の 処 な 舟 IJ に の 花 は 小 其 あ 長 角 ιζι 有 刀 ち

田 鳴きはせで 植 を ば は づ れ T ıŠ١ る ゃ 虎 が ໜ

ゃ つ しし ۲ 覗 て つ

脳 Щ

÷

ゃ

厩

も

見

え

7

栗

の

は

こ

ιŠἳ

哉 花 内

ね

1) 鍛

塀 冶

ത ത

こ か

3 な

び <

か そ

۷

る

ゃ

花 樗

蒟 年

蒻

ത

従

弟

は た

僧

で

な

ま

哉 迎 樗

も 米

さ

ゃ

麻 の

の

ク

の

も

れ

柱

ゃ

星 こ

子

う

h ゃ

で け

猫

か

3

げ Ш

1)

な

は を 月

L

3

に

去

の

案

子 な

۲

見

え

鳧

 $\overline{\mathcal{H}}$

ໜ

ιŠί

IJ

は

出

ず

家 衣

の が 女 不 飛 先

郎 細

花

莟

の 年

内

の

名

成 灯

ベ

L 哉 な

込

で

我

も

う

ゑ

た

る

早

苗

か

I

を

親

に

手

向

ル

篭

つ

つ

ح

行

燕

に

た

5

ぬ

町

屋

哉

宿 の

を 葉

酔

て 心

出 も

た ۲

か に 鴬 桐 < ま の L١ 葉 < ほ 5 の تع 露 の 兒は の 小 の お 町 あ

か

さ

ゃ しし

菖ゅゃ ح

蒲ぁ

ιŠι

き <

ゅ

町

秋

<

れ 月

あをかき集 堀内一郎選

(六人目以降五十音順)

定梶じょう

学校の窓の全部が梅雨ゆやけ

朽ちさうなむかし船小屋浜ゑんど とある駅停まる一輪夏あざみ

撮るときに薔薇を一輪写真館

煉瓦塀喪服行くとき夏兆す

六月のドクターの指しなやかに 珍らしい茅葺本堂苔の花

白白と朝鮮朝顔夏の宵 退院の家への道筋白四葩 山割って光の河となる雪解 鳴きづかれし蟬月光の樹に眠る

渡邉

石仏の慈眠蝶よぶ眼をほそめ

吉弘

紋白蝶杉戸の奥の奥にかな ふところの瀬音冷え来て芽木暮るる

偲ぶとき郭公果てもなく孤独

なまじいに岩に杉藻の群るるかな ひとり来て縄文杉の梅雨雫

初夏や曙杉の下に入る

東照宮の傍の小径へ鴨足草 杉苔のあたまをなでる夏帽子

森

理和

五日目は開かず沈む姫睡蓮

櫓の軋みゆらりゆらりの花あやめ

下総の果て無く青田女子高生

芝宮須磨子

山深く瑠璃鳥の声あとをひく身暮の庭くちなしの香流るタ暮の庭くちなしの香流る	立葵垣根のごとく並びをり風薫る少年少女吹奏楽電柱の鴉一声昼寝覚	何処へか田圃とび出す雨蛙赤蜻蛉木も草もなき車山がく日天向く日あり繍毬花図書館に睡魔きてをりほととぎす	信玄の棒道卯の花腐しかな乳母車に居眠る嬰児も麦の秋電葉風雨の止む間を渡り来る	白点々にしく
森山のりこ		早 崎 泰 江	東 亜 未	長崎桂子
そこそこの味と言ひたし我トマトプランタのトマトー号試食会あぢさゐののさばるままに裏の坂	ジューンブライト新婦の裾のふわふわ静岡市葵区からの新茶かな夕焼の中少年の逆上り	本抜きしあとの隙間に西日さす足の指大きく拡げ蓮華踏む浜焼きのさざえ尻より香をたてり	出羽三山幾光年の星明り大虹や裏表ある霞ヶ関大虹や裏表ある霞ヶ関	くちなしの一輪でよき厨かな紫陽花や江戸紫の今日の色紫暗から夏雲の穴湖光る
斉 藤 裕 子	木村茂登子	鎌倉喜久恵	遠藤実	赤座典子

ローソクを灯して独活の室に入る	<	空豆のひとつは椅子の下にあるソフトクリーム唇で天辺征服す	言はでもの新茶といひてすすめけり せ若者の戒名四文字走り梅雨	ひと粒の薬に頼る青葉の夜とうさんの豆の飯	櫻桃忌魔法の効かぬ魔法瓶まぎれなく去年のお前蟇
鈴木多枝子	須賀		芝		篠 田
· 枝 子	敏 子		尚 子		純 子
		梅雨晴にきっとも一度葛西の旅	梅雨しらずガラスドームのレストラン夏至吟行高齢者半額笑ひあふ	荒梅雨の待合はせ駅さんざめく藤野水族館へ海月めくなり傘の列	パレットの中から生まれ熱帯魚梅雨の水ずうっとマンボウは孤独
100					

短夜に続けて見たり母の夢

夏至の昼おぐらき水族館歩く

田中

藤穂

何燦々

学校の窓の全部が梅雨ゆやけ

じょう

はなつかしさの象徴再燃である。解り易さが良い。 壮大な風景にそれぞれの母校をも想起させる。紅

鳴きづかれし蝉月光の樹に眠る

友七

品格を与えたと思う。人生命の尊厳にも及ぶ。 上六スムースと言えぬが中七下五が巌と受け止め

紋白蝶杉戸の奥の奥にかな

恭子

う紋白蝶は祖霊の化身のように作者を吸い込む。 旧家或いは武家屋敷など感じる。未知の世界へ誘 蝶

を蝶とも思わずである。

本堂の荘厳さと比べ一歩裏へ回ればひっそり。 東照宮の傍の小径へ鴨足草 理和 ゆ

きのしたの花は地味な花で東照宮には似合うよう

だ。少し浮かべる紅は旅人の心を癒す。

六月のドクターの指しなやかに

須磨子

とした。白四葩も作者へ手を振る。 六月という滑りやすい語感が下五と相俟って佳品 退院の句もあるから快方に向かっているようだ

乳母車に居眠る嬰児も麦の秋

桂子

原句の上五の麦の秋を下五として据わりよくし

た。

信玄の棒道卯の花腐しかな

東亜未

社・釜無川・七里岩等眺め、 忌であちこち眺めてきた。タクシーの中から武田神 棒道は戦場をつなぐ道路であろう。父の三十三回 車山で清泉寮へ一泊し

た思い出などなつかしく。

何処へか田圃とび出す雨蛙

泰江

喜久恵

女の吹奏楽も作者を透明にする。 よい環境に恵まれている。 蛙から喜びを、少年少

息はずむ三段滝の見えかくれ

のりこ

る。 とは思い出を呼び覚まし感激を頒ち合うものであ 私は奥鬼怒のオロオソロシの滝を思い出す。 俳句

紫陽花や江戸紫に今日の色

典子

「江戸紫の」を「に」にと外すと展がりが出る。

千本の杉を日傘に東照宮

実

味が出る。

カシサ。 荘厳さ千本杉と呼応する。日傘の慎ましさに宿るオ 「大虹や」にしても大きな掴み方は豪快。この作

夕焼の中少年の逆上り

すべて安定の日々。楽しい刺激であると言える。

通称をあぢさゐ寺とや雨の庭

茂登子

てたかって裏の坂」であらたまる 境内は言わずもがな。「のさばる」は難。例えば「よっ 原句の「寺とや」のとを取り「境内」 を庭とした。

プランタのトマト一号試食会

裕子

れあいを感じる。「短か夜に」は「短か夜や」で深 トマトは四句あった。試食会ににぎわいが見えふ

櫻桃忌魔法の効かぬ魔法瓶

くどい表現だが裏に世の中そう上手にはいかぬの

純子

意が篭められている。「とうさん」の重ねは親愛の

言はでもの新茶といひてすすめけり

尚子

ら新酒としたい処。そこから話に花が咲く。

話のとっ掛かり言葉の栄養剤になるようだ。

私な

父の日や水族館にシュモクザメ

敏子

て欲しい願望。プレゼントである。 父の日と鮫の精悍さは父親へいつまでも元気でい

雨好きの紫陽花なれど雨に泣く

た。同じだが念を押すか「逃がすか」の違いである。

下が「泣く」だから「なれど」を「なれば」にし

水族館へ海月めくなり傘の列

藤穂

傘から海月をイメージしたのは正に詩人の目。

マンボウの孤独は自身でもあろうし共通の魅力。 夏至吟行高齢者半額笑ひあふ

> 思わず笑い合う。元気何よりである。 半額は有り難い。しかし一人前ではない悍しさに

あを吟行会のお知らせ

九月 東京タワー

集合地

三縁山広度院

増上寺

時 9月26日 (土) 午前11時

 \Box

昼 食 句会場 未定

多枝子

申込み〆切 9 月 20 日

申込先

篠田純子

090 9368 3088

十月 林試の森公園

詳細は次号で

寿子

あをキーワード俳句辞典(お)

																	_
流燈やその幼子の手を放すな	手のひらに幼き日あり鬼灯あり風邪に寝て妻待つ心幼しや	は幼り	したたかに打ちし酒の香栗御強飯	紅葉狩紅梅苑の栗御強	御強	短夜を老犬幾度も呼び起す	藍染の絵団扇藍の風おこす	植ゑし田に風が生まれて波おこす	春一番自転車おこすこともなし	起す	閼伽桶の家紋橘春彼岸	澄む水を手桶に満たし夫のもと	月明り檜の湯桶ちと重し	桶の水たちまち草の絮とらふ	真夜中の用水桶の子子たち	桶	i de la companya de l
竹内。弘子	鎌倉喜久恵 友七		木村茂登子	芝尚子		東亜未	長崎 桂子	鈴木多枝子	堀内 一郎		木村茂登子	芝宮須磨子	森理和	佐藤 喜孝	竹内 弘子		信任 哲 男 (34)
	哀しみを秘めたる島に秋惜しむ車椅子握る手に汗春惜しむ	,	蛇怖じて足早に過ぐ野道かな	蛇怖じぬ女と言はれ青き踏む	怖ず	春濤の流木を押す押しきれず	足を持て田植定規を押さへつけ	朝潮に乗り神輿曳く神輿押す	彼方より押し寄す不安春の海	押す	雪吊に松はんなりと納まりぬ	福だるま埃のままに納めらる	雛の髪すこし直して納めけり	納む	緑陰の鳩幼子の歩で逃げる	幼子と金魚育てし日も遙か	
	須賀 敏子		山荘 慶子	鎌倉喜久恵		定梶じょう	芝宮須磨子	篠田 純子	田中 藤穂		木村茂登子	森山のりこ	鈴木多枝子		赤座 典子	山荘 慶子	

私より若い方だ。 みいる俳句である。「神楽笛夜も鋭き山並ぶ」もこの句集に所収されてゐる。 笛が聞こえてくる。産土神に抱かれたやうななつかしい景がうかびあがる。おほどかで体にし でよい。「山の形に山があ」るのがこの句の魅力。山の形といふ自然体の容をした山に、神楽 のだらうか、といふ限定をすることは要らない。読者がおのおの思ふところの原初的な山の形 著者略歴よると一九四九年福岡県生、『白桃』の伊藤通明に師事、二〇〇三年『空』創刊主宰。 「山の形」とはどのやうな山容を云ふのだらうか。象形文字の「山」のやうな姿をした山

神楽笛山の形に山があり

柴田佐知子著『垂直』より

山門に雪の大路が入りゆけり冬ざれや空ゆくときの鳥の脚

読んでゐてもさういふ体験をすることがある。といふことで此句集には愛唱する句があまたある。 門を跨いで通る春の道」。同じやうな目線で物を見る人がゐる、ゐたと云ふことも喜び。古句を 次頁には著者自選十句にわたしの好きな句の一部を加えた。 この二句より拙いが、目線の似た下記のやうな私の句がある。「飛ぶ鳥の脚の始末に秋の艸」「山

佐藤喜孝

『垂直』より

鳥

ζ

ぼ

み

7

ŧ が 風

と

に

参

道

は

大

道 女

椋

美 \exists

< に

な

け

れ き

ば

雪

に

記

は

書

か

ず

忘

れ

ず

水

打 瓜

5

L

あ

た

り

す

こ

能 浮 鶏 千 <u>\frac{1}{2}</u> 母 流 闍 鰯 マ フラ 人 れ が ち 面 汁 丰 老 形 止 つ 1 0) ひ 勝 に 仏 ど を巻 < ま 裏 5 ح 手 龍 千 7 る 海 は \sim 1 0) が に 0) 霞 と 底 てやるすこし絞め Ł 嗚 な 月 鱗 行 蛍 き に 0) を 夜 い 母 け 雛 垂 を 通 ず 入 に 0) 7 あ 直 ふ 放 浮 Щ 茄 れ 教 ま 0) き上 ち 体 た 子 は 漏 た け る な 立. O路 り が

秘

す

こ

と

0)

は

じ

め

丰

毬

を

戻 ŧ 暗 背 鳥 河 5 髪 な み に てや 渡 ざ 洗 か た n 硘 る る ず 5 な 花 杖 え る る と n り つ L 青 遠 波 飛 父 Ш 神 俎 青 幽 は 母 菱 逢 抛 押 夕 採 瀬 り 0) 花 足 失 な 0) 癒 い 魚 空 年 0 霊 込 日 に り 野 0) せ び え 北 辺 が 0) 海 Þ は む 0) に 歩 ま L 5 7 風 に ŧ ŧ 水 あ 木 鼠 る Щ 正 ts た 海 せ 道 0) B ぐ 帰 面 5 0) 正 は が を 座 同 0) 上 に ŧ 打 ず 根 男 り 面 売 ぐ 指 包 じ は B に 77 ち 懐 が 蝮 5 を に 道 あ は 捨 炉 焚 V 7 つ 子 高 を が 8 れ あ 待 た あ 7 は 火 な ろ 0) れ 男 ゆ 押 り 押 廻 る 5 背 り 7 り り B げ 叱 ぞ < 枇 れ L に る 成 夏 麦 る 春 5 百 韮 L 杷 L あ つ 夕 料 木 蝮 返 れ 花 力 0) 0) 0) 日 3, لح OB り 花 秋 責 理 花 桜 筵 石 星 紅 う ぬ す す 7 酒

あを柳集

兼題 杉

選

	房山	日源着	
滴	古	初	杉
- り	—祥	蝶	0
4	天	の	根
ス	杉	こ	4
7	祥天杉の一木	蝶のこつんこつんと杉林	ま
ン	H-	h	ま
グ	木	2	子
	風 凉 し	_ つ _	まま子がけふも
て -	凉	- h	- l } -
カ	L	_ ح	ふ
る	+++	杉	ŧ
滴りやスイングしてゐる杉の		林	泣き
の			き
Щ			に
			3

を選すると云ふことをより鮮明にするため今回のやうな割付にしてみました。こういふ場所で選 したか。この集は意識的に作者名を俳句から取り外して鑑賞しやうと思ひます。人ではなく俳句 が、あを柳集は兼題と季語を合はせて一句を成す事に大方はなる。第一回目の「杉」はいかがで あを柳集は題詠集です。虚子の作品は大半が題詠だと聞いてゐる。題詠といっても季題詠です

杉の根やまま子がけふも泣きにくる

をするのは初めてです。選をするといふより答案を書かされてゐる気分になりました。

るさみしさであらうか。 けるやうだ。無季の句であるが、さう感じさせない情感を持つてゐる。作者の胸奥にねむつてゐ も杉の木の下に泣きにやつてくる。柳、松と木はさまざまにあるが、杉の根方のさびしさには負

掲句は昔話か民話で読んだやうな気のする場景である。まま子ゆゑのかなしさをかかへて今日

*根性など後に付く言葉からして暗い。 まま子も「継子」と言はれなければ何ともないのであるが、「継子」と言ふ言葉が*虐め、*扱ひ、

けふも泣きにくるのを知つてゐるのは作者のみである。

蝶のこつんこつんと杉林

初

に飛んでゐるやうにもみえる。蝶の飛ぶところは花の上が定番だがこの句はくらい杉林の中。実 蝶も蜻蛉も空を飛ぶ昆虫の翅は硬質である。飛び方のまだぎこちない初蝶が杉にぶつかるやう

ものをよく見た作品 景ではなく心の中に描かれた情景であらう。心象風景ではあるが実在感がある。初蝶といふ生き

吉祥天杉の一木風涼

涼しさといへば杉の右に出るものはないだらう。一本仕立てといひ大ぶりで涼しい一句。東亜未 さんの「屋久杉の一枚天井涼しさよ」も同工同曲の句。 杉の一木仕立ての吉祥天像であらう。仏像には杉のほか、 欅、樟、檜など使はれるやうだが、

滴りやスイングしてゐる杉の山

痛快な句である。 杉山全体がスイングしている。滴りの句として試みの成功した作品。体験がなければ生まれない 滴りを見てゐる。そのうち作者の体が滴りのリズムに同調してきる。滴りのリズムに合はせて

第四回 「仮」 九月〆切第三回 「白」 八月〆切

送付先の数自由用紙・句数自由



夏空を切り割いてなほ伸びゆく杉 糸杉も金の穂麦も死の予兆

竹内弘子

杉折の蓋の御強をとりつくし

滝行の音声登る杉木立

屋久杉の一枚天井涼しさよ 滴りやスイングしてゐる杉の山 花粉なき杉と説かれし庭木かな 矢絣に藤の織り成す杉の山 勝つまでは日の丸弁当杉苗植う

水無月や切株白き杉の山 杉を洩る涼しき灯あり人の住む 吉祥天杉の一木風涼し

初蝶のこつんこつんと杉林

夏杉をたちきる蝶のかろがろと

燕くる杉村春子の隠し皺

田中藤穂

吉弘恭子

東 長崎桂子 理和

森

藤野寿子

篠田純子

亜 未



杉垣の真中をのぼる烏瓜

麻地酒磨き丸太の吉野杉杉折にそつとしのばす櫻餅

杉の根やまま子がけふも泣きにくる

定梶じょう

杉の苗植うるが墓標金魚塚杉の穂のさみどり航空路に尖る

天狗杉辺りに夕立あるらしき

日焼の子杉の実生をいとほしむ

百獸の王に見えゐる雪の杉

校庭の野球に倦みし杉落葉

杉並区大字竹林字椋鳥

杉折に紅のうつりし冬磧

杉山のぼこと剝げたる暑さかな

縄文杉傍へはひとりひとり行く

(参加総数 四六句)

佐藤喜孝

六月の 句会

傳 中野区

葉桜の根の盛りあがる痛みかな 亀鳴くと真顔のをとこ喉佛 美しき包丁をもて鱧をひく 梅雨に入るローカル線内クラシック ひと粒の薬に頼る青葉の夜 六月や真水といへばコンビニへ 喜久恵 恭

螢袋虻の唸りにふくらみぬ ふくらはぎ濡れてたよたよ梅雨茸 さくらんぼ分けて奇数と偶数と 京うちわうごかし山をうごかしぬ 六月や口金かたき水枕 介護士の小さな笑顔姫女苑 茂登子 弘 敦 泰 木 実 裕

杏色づきまあるい月の昇りけり 新しき伐株光る蝉しぐれ 東京者が祖母の口癖麦の秋

宇宙から夏雲の穴煌めける 両の手で捥ぐさくらんぼさくらんぼ

典

子

水郷の青田青田の地平線

和

子江子

岸町公民館

北斎の浮世絵の浪ビアガーデン 老人ホーム見上げるほどの沙羅双樹 子 子

百年の朽木のにほひ下闇に

カフェ傳

仮の世の夕刊を読む桜桃忌

父の日や水族館にシュモクザメ みづくらげ海鳴りの音なつかしみ あを吟行会 喜久恵 敏

鮪のうけ口鮫の反っ歯や梅雨ひと日

夏至の昼おぐらき水族館歩く ナイアガラのやうな滝過ぎ水族館 深海に下闇に似てくもひとで 水槽に水ぼこりして鰹かな 典 綾 敦 藤

万華鏡覗くが如し額の花

子

荒梅雨や込みあふ臨海水族館 まんばうの右目つむりて前よぎる

梅雨深し烏賊のポーズをしてみるか 裕次郎忌ハンカチいさぎよく振らん 七座句会 中野区・小川

苑

(0488-86-3501)

夏椿おもひはせるは古都の寺 深井戸を覗いてをりぬ梅雨の月 生きものの一つも見えぬ青薄 その事をつげたき人や夏かすみ 房 純 須磨子

林

代

みささぎの森闇深しかたつむり 紫陽花やイロハはみんな丸の中 燕来る杉村春子の隠れ皺 深寝して白地の父と語りゐし 東亜未 藤

六月の豆腐くづれて街暮るる 世論聴く大き耳欲し羊朶若葉 人混みの仲見世に買ふ祭足袋

友 藤 綾 七穂 子

弘

葛西水族館

連句勉強会

毎月第2日曜

出席希望の方は連絡を

(090-9828-4244

傳句会 カフェ傳 毎月第2火曜 理和

子 子

調句会 岸町公民館 竹内弘子 毎月第3金曜 (03-3368-4263)

あを吟行会 詳細は吟行案内で

七座句会 小川苑 (090-9839-3943)吉弘恭子 九月第5火曜

係のない第三者を自分の都合で殺す事件が目につく。 昨年の秋葉原の大量殺人事件の犯人もそうだが、関

後で犯人が〝無視をされた〟〝目立ちたい〟といふ意

味の事を云つたと新聞に書かれてゐる。

なければ大方の人は淋しい。悟りを開いた人でも点は やはり連句会の方がこの言葉は合ふ。句会で点が入ら ればならない。俳句の仲間を連衆といふが、句会より ない意見が飛び交ふので大いに勉強になる。無声 の入らないこと)の時はひとりでその理由を考へなけ 俳句は句会で鍛えられる、といはれてゐる。忌憚の

といる事は欠片もない。 ところがある。連句は一人一人が主であり、無視など ではないが)捨てなければならない。出てきた作品に 合はせることが主でその上で個を少し主張するやうな

個の文学である。そこへゆくと連句は個を(まったく 入った方が嬉しいらしい。連衆といふが俳句はやはり

にしてゐるのかも知れない。連句は風通しの悪い世間 といふ意味で俳句より連句の方がかへつて個を大切

に風穴を開ける潤滑油になれさうだ。

御芳志多謝

田中藤穂 様

藤野寿子 様

二〇〇九年八月号

電発発行 話所日 090-9828-4244 東京都中野区中央2-50-3 七月二六日

印刷・製本・レイアウト カット/恩田秋夫・松村美智子 表紙・佐藤喜孝

00130-6-55526 (あを発行所) - 00000円 乱丁・落丁お取替えします (送料共) /一年

郵便振替